大阪ワイド

桜

二王門と桜

「満開だろう
日、遅咲きの桜
有名な御室仁和
にんなじ）を訪
屈指の桜の名所
で近づくにつれ
どくなる。
寺の前の交差
しきつくなって
ねぇ」と運転手
「この時期て
なもんでしょう
いると、どうし
これまでのノロ
ようにサッと動
桜の時期にこ
れるのは30年ぶ
ろう。人ごみな
のが最大の理由
だが、時代変
どで、この寺の
景にした満開の
にしているうち
てきたというの
到着後、寺務
影許可を申し込
は「今年は開花
う桜は終わりに
ど」という。
早いことは
ものの、それ以
いたようだ。
!!」と思った
ですよ」と笑

好きがスキルに　専門学校から

嚥下リハビリ「ニーズ増える」

言語聴覚士

大野木宏彰さん（39）㊦

28歳で大阪医療福祉専門学校の言語聴覚士学科に入学した大野木宏彰さん。

当時、言語聴覚士は国家資格となってまだ数年の新しい資格。「同期は約40人。大学新卒者から社会人経験者まで、年齢も20～40代と幅広かった。新しいスタートラインに立つため、みんな必死だった」

学校では、言語障害や聴覚障害、嚥下障害（飲み込みの障害）など幅広い分野について集中的に学んだ。講義や病院・施設での実習があり、2年間の学生生活はあっという間に過ぎたという。同期の仲間らの進路は、病院や老人保健施設、養護学校など。そして、自身は京都府内の市立病院に言語聴覚士として採用され、平成16年から勤務を始めた。30歳のときだった。

「そのとき驚いたのは、予想以上に嚥下障害についての判断を求められたことだった」

一般のイメージと同様、大野木さんも言語聴覚士の仕事は、コミュニケーション障害のリハビリが主と思っており、専門学校でもそれを中心に学んできた。

だが、医療現場で求められた仕事は違っていた。戸惑ったが、嚥下障害のリハビリに携わることも、もちろん言語聴覚士の仕事だ。「知識は学んでおり、あとは経験を積みながら技術を磨いたり、独学でさらに知識を得たり…。とにかく、現場のニーズに応えようと懸命だった」

そして、大野木さんは、自らが嚥下障害のリハビリの〝プロフェッショナル〟として歩んでいくことを決めた。19年から規模の大きい岐阜赤十字病院（岐阜市）に移り、患者の嚥下評価や指導のほか、聴診器を用いた嚥下評価の研究や啓蒙活動などに力を注ぐ日々だ。23年には評価法をまとめた著書「嚥下の見える評価をしよう！頸部聴診法トレーニング」（メディカ出版、写真）を出版した。

「例えば、液体は一般の人からすると、最も飲み込みやすいと思われがちだが、嚥下障害のある人にとっては最も誤嚥（食べ物や飲み物が気管に入ってしまうこと）しやすいものになる。誤嚥を防ぐために、液体にトロミを付けたり、ゼリー状にしたり。食事内容だけでなく、食べる姿勢や介助方法など、患者の状態に合わせていろいろな工夫をしていきます」

高齢者人口は増える一方。誤嚥が原因で起こる高齢者の肺炎も右肩上がりで増えていくことが予想される。嚥下障害を抱える患者をサポートするための人材や環境を整えることが急務だ。

「嚥下障害に対しては、早期に発見し対応することが大切。そのためにも、今後、地域の人々が気軽に相談できる嚥下外来のような窓口を作っていきたい」

（福本剛）

「嚥下障害の判断を求められるケースはさらに増える」と話す大野木宏彰さん

言語聴覚士になるには　法律で定められた教育課程を経て国家試験に合格し、厚生労働大臣の免許を受ける必要があり、コミュニケーション障害や嚥下障害などの幅広い専門知識や技術が求められる。就職先としては医療、福祉、教育機関などさまざま。社会のニーズもあり、活動の場が徐々に広がっている。